

セックスレスの時代

頼藤 和寛

大阪府中央子ども家庭センター主幹(精神医学)

3年あまり前から新聞の人生相談みたいな欄で回答をしている。ときどき性生活の悩みがやってきて、それに紙面で答えると、直後にパタパタと類似の相談が相次ぐことがある。恐らく、それまで悶々としていて、あるとき新聞で似たような悩みのあることを読み、「実はわが家も」とか「我も我も」とかの気持ちになるのであろうか。

近年では自分や相手が「強すぎて困る」という悩みより、「弱すぎて困る」といった訴えのほうが圧倒的に多い。まあ、昔から強すぎるのはあちこちで複数の相手を開拓していくものだから、ひとりに被害が集中しなかったであろう(もっとも、よそばかりに熱心になって本家が孤閨をかこつということはある)。しかし、そんな豪の者も若い世代ではだんだん減っているのではないか。マザコンとか新婚インポとかテクノストレスとかの青壮年が「セックスフル」とはとても思えない。

世は着実にセックスレスに傾いていっている。かつての婦人雑誌綴じ込み付録の時代から過激マンガ、ヘア論争、アダルト・ビデオ、エッチCDとメディアやイメージの世界では性解放が進んでいる。にもかかわらず、戦後青少年の性犯罪は漸減傾向にあるし、大半の善男善女も結構お行儀がよくて実際の性行動は(江戸や明治の時代に比べると)案外寥々たるものなのである。

この10年ほどで性科学、特に脳の性生理学は飛躍的に進歩しているらしい(たとえば「ここまでわかった! 女の脳・男の脳」新井康允著、講談社ブルーバックス)。性欲だの性差だの同性愛だのの神経メカニズムが、かなり明らかになってきた。養育や文化などと関係なく男の5%は生まれつきホモのようだし、なんとかという大脳神経核がもともと

小さいと異性への関心もしぼりだしようがない。ただ、こうした生理的限界は時代を問わないだろう。当今の問題はマトモに生まれているはずの平均的な男女の性衝動までが漠然と減退しつつあることなのだから、社会文化的現象からの影響も無視できない。

どうも暖衣飽食や刺激情報洪水の時代のほうが、情熱、劣情ともに貧困になる。電灯もテレビもない時代なら娯楽といっても夜にすることなど一つしかない。戦争直後や人口減少時代だと不思議に生殖活動がさかんになる。身近に死が充溢している状況下でも人間の性衝動は昂進するといわれる。それにひきかえ安穏平和で多彩な趣味享楽に事欠かない時代、都市化が進み1億3千万がひしめいている国土、細かい神経ばかり使うわりに生き死にに関わらぬ富裕な現代にあってはエロスが衰弱しても不思議ではない。

そりゃ若いあいだはホルモンの後押しもあるから、文明と関係なくそこそこがんばれるのだろうが、こんな時勢にそのあとの長い人生、情熱の勢いを維持していくのはなみたいではないかな。あこがれと実践は別物である。日本にも橋はたくさんあるのだが、「マディソン郡の橋」でないと霊驗あらたかではないようなのだ。

古来「秘すれば花」「忍ぶれば恋」といったことがいわれている。今日のように秘しもせず忍びもしない男女共学、デート・マニュアル完備、恋愛賛美にホテル乱立、いやそれどころかグラビアでアイドルの陰毛まで数えられる文明開化の社会にあって、もともと野性由来であるわれわれの性的ポテンシャルは低下していくしかないのではなかろうか。